

2018年人間発達学部附属子育て支援センター活動報告

野村 宗嗣
宮内 孝一
古賀 隆一
金子 幸一
鳴海 正也

はじめに

南九州大学人間発達学部附属子育て支援センターは、人間発達学部の新設とともに、2010年4月から大学の地域貢献と学生の学びを主たる目的に、「子育て支援室」「チャレンジ運動教室」「あそびの教室」などの活動を行ってきた。子育て支援センター開設当初から「子育て支援室」「チャレンジ運動教室」「あそびの教室」は毎年継続している活動である。「子育て支援室」は子どもや子育てに関する地域の方の教育相談を受ける活動である。「チャレンジ運動教室」は体育専門の学部教員1名と学生ボランティアによる、運動・動作につまづきのある子どもたちが保護者とともに運動遊びを体験してもらう活動である。「あそびの教室」は美術専門の学部教員1名と学生ボランティアによる、地域の子どもと保護者を対象にした工作遊びを体験してもらう活動である。そして2015年3月のトライアルの後、2015年5月より、子育てひろば「みなみん」の活動を非常勤保育士と学生ボランティア、そして複数教員が担当となり行っている。加えて2016年9月からは、障害のある子どもと保護者を対象とした心理サポートを始めた。現在、継続的に支援学校在籍児童生徒4名、支援学校卒業生3名が来室している。

本報告では、2018年の「人間発達学部附属子育て支援センター」の活動について報告する。

1. 子育て支援室の概要

2010年4月から相談を教員1名（臨床心理士）が2018年3月まで継続的に完全予約制で行ってきたものであるが、本年度は教員1名（臨床発達心理士、特別支援教育士）が月曜日から金曜日まで

予約制で相談業務及び個別の指導を行ってきた。昨年まで相談されて継続されたケースは5件のみであった。その後も、継続での相談がなかったことから、引継ぎがうまくいっていなかった可能性がある。

今年度からは、相談業務につけ足して、学生と共にケースを指導していく、ケース研究も実施していくこととした。

(1) 予約申し込み

表1に電話受付と新規来談の月別件数を示した。今年度当初、担当者が変わったこともあり相談件数が著しく、減少したがその後、少しずつ相談件数が増えていき、前年度以上の相談件数が寄せられることとなった。また、新規の相談者に発達上の課題が多かったことから、アセスメントから個別の指導という流れが自然と作られた。

表1 電話受付と新規来談の月別件数

月	受理面接予約	電話のみ	新規来訪
4	0	0	0
5	0	0	0
6	1	1	1
7	0	0	0
8	0	0	0
9	2	1	2
10	2	1	0
11	1	0	0
12	4	1	4
1	4	1	4
2			
3			
計	14	5	11
	19		11

(2) 子どもの性別

昨年度までは、1:9で女子の相談が多かったが本年度は、まったく相談層が変化し、逆に9:1で男子の相談が増加した。このことが何に起因しているのか今のところ不明であるが、相談担当者の性別や専門領域が影響を与えている可能性があると思われる。一般的に発達障害の多くは男子の方が多く、顕在化することを考えると男女比と相談内容の変化に関連がある可能性が高いと言える。

また、相談の年齢層が下がり、思春期以降の来談者が減少し、小学生以下の子どもの相談が主流を占めるようになったのは、子ども教育学科が行う社会貢献としては適切な方向性だと考えられる。

(3) 相談内容

表2に相談内容を示した。相談内容も昨年まであった離婚や保護者の精神的不調と言うような内容はなく、子どもの発達に関する内容がほとんどであった。一般に、

表2 新規来訪者の相談内容

	男	女	計
発達に対する不安	8	0	8
学校の対応	1	0	1
指導方針	4	1	5
発達検査関連	8	0	8
親子関係	0	2	2
指導の内容	1	0	1

(4) 新規来訪者の居住地

今年は、ほとんどの来談者が都城であったが、少数ながら三股町や曾於市からの相談者もあった。来年度は、都城近辺の子育てを充実していく方向性も考えながら進めていくことが重要であるが、人員の確保や専門性の問題も大切にしていくなりが必要があると思われる。

表3 面接日数と面接回数と個別指導

月	面接日数	面接回数	個別指導回数
4	4	4	12
5	3	2	9
6	4	4	15
7	3	8	11
8	0	0	
9	2	8	14
10	4	9	14
11	4	9	11
12	4	3	12
1	4	4	14
2			
3			
計	32	51	112

(5) まとめにかえて

本年度から相談と指導を一体化する方向で活動してきたので、新たに個別指導という項目をあげて、集計を行った。そのため、昨年度までの資料と単純比較できないが、相談回数は、増加したと言える。

教員養成学部の附属センターとしては、単なる心理的な相談機関としてではなく、指導、評価ま

での一連の流れを大切にす相談活動が重要であるとする。また、学生の実践力を高める場としての子育て支援センターの在り方を検討していく必要がある。そのことによって、学生たちにとってより開かれた子育て支援センターにしていくために研究員制度等を作成し研修を充実が図られるのではないかと考えられる。

子育て支援センターとして保護者自身の相談も大切であろうが、子ども自身の相談が増加の傾向にあることは、本来の子育て支援センターの方向として正しい方向性ではなかろうか。さらに、効果的な子育て支援センターの在り方を検討する余地があるのではないか。

1月	16日、30日
2月	13日、27日
3月	6日、20日
4月	10日、24日
5月	8日、22日
6月	12日、26日
7月	10日、24日
8月	7日、28日
9月	11日、25日
10月	16日、30日
11月	13日、27日
12月	11日、25日

2. 子育てひろば「みなみん」

子ども教育学科附属子育て支援センターの取り組みの一環として開催している子育てひろば「みなみん」の取り組みも今年度で4年目となった。地域の子育て家庭を支援すること、また、学生が乳幼児とその保護者とのかかわりを学ぶ機会を作ることを目的に、定期的な開催を実施している。活動も4年目になり、現在、運営の中心となっている4年生は1年生の頃から積極的にボランティアに参加していた学生であるため、親子とのかかわりも積極的になっている。今回は、平成30年1月から12月までの活動について報告をする。

(1) 実施の概要

①実施回数：計24回（1月～12月）

開設当初から、原則月2回、毎月開催することを目標としている。隔週の火曜日を実施日と設定し、午前10時から12時までを開設時間とした。実施日の詳細は以下の通りである。

②利用者数

1月から12月までの計24回の実施で、利用した保護者の人数は延べ252人、子どもの人数は延べ321人であった。

③参加学生数

参加学生については、前期はボランティアとして自主的参加の学生が主であり、後期に関しては、ボランティアの学生に加え、子育て家庭支援論受講の3年生が輪番で参加をした。1月から12月までの計24回の実施で、学生の参加人数は延べ166人であった。ボランティア学生の中心は3・4年生であった。時間割の都合上、1・2年生がボランティアに参加することが難しく、例年、課題となっている。しかし、4年生が1・2年生の講義の中で、みなみんの活動について説明をする機会を設けたため、1・2年生の関心も高まり、講義期間中は1・2年生のボランティア参加はできないが、長期休業中に開催されるみなみんのボランティアとして今年度は1・2年生も多く参加をしていた。

④運営スタッフ

子育て支援センターのパート保育士であるYさん、4年生の5名を中心として準備、運営を行った。学部教員は、担当時間を割り当て参加し、学生へのアドバイスや保護者から相談があった場合

には対応ができる体制をとった。

複数の教員がみなみに参加をすることで、それぞれの専門知識を生かして保護者からの相談に乗ることができた。

(2) 取り組みの実際

毎回、実施日の1週間前に参加学生が集まり、準備会を行った。準備会には子育て支援センターのパート保育士であるYさんにも加わっていた。学生へアドバイスをお願いした。準備会では、お楽しみ会の役割決めや手作りおもちゃの作成、既存のおもちゃの消毒、壁面構成等、実施日に向けての準備に取り組んだ。また、実施の案内・広報に関しては、大学のHPに開催案内を掲載することや、昨年から続けているみなみのTwitterにも開催日の案内を掲載した。Twitterでは、施設の写真や学生の準備会の様子などを掲載し、初めての人でも安心して参加できるように心掛けた。また、近隣の子育て支援センター等に開催案内のチラシを配布した。

お楽しみ会では、パネルシアターやペープサート、からくり絵本の読み聞かせ(夢を叶える塾にて制作)、ダンス、わらべうた等、学生の趣向を凝らした内容で実施した。

今年は、6月に、古賀教授による「子どもの絵」についての講話、12月にクリスマス会を実施するなど、参加者により楽しんでもらえるように計画し、実践した。

活動の流れは以下の通りである。

9:00～	学生集合 →環境構成(受け入れ準備、掃除等)、お楽しみ会のリハーサル
10:00～	親子の受け入れ →受付、子どもの名札を作成
11:30～	お楽しみ会 →パネルシアター、ペープサート、からくり絵本、わらべうた 等
12:00～	片付け
12:10～	一言反省会

4年目の取り組みとなり、学生の積極的な提案を基に運営を進めることができた。今年は、運営

の中心となる学生が5名いたこともあり、様々な意見を出し合って、活動に取り組む様子が見られた。

(3) 今後の課題

子育てひろば「みなみ」も4年目の取り組みとなり、積極的に運営に携わりたいと申し出る学生が増え、今年度は5名の学生を中心に運営ができた。その結果、毎月2回開催でき、昨年の課題であった定期的な開催を実現できた。今後も定期的な開催ができるようにしていきたい。また、運営に携わる学生が増えたことで、多様な意見を出し合いながら取り組むことができた。実際、古賀教授の保護者向けの講話やクリスマスなどの行事は昨年まで実施していなかったことである。しかし、これらの計画案を立てるのが遅く、保護者への周知ができないまま開催に至ってしまった。1年間の活動に見直しを持って計画していくことが今後の課題である。

3. チャレンジ運動教室

(1) ねらい

近年の「都市化による遊び場の減少」「少子化による遊び仲間の減少」そしてテレビゲームやコンピュータゲームなどの「子どもの遊びの変化」などにより、子どもが身体を思い切り動かして遊ぶ機会は、減少の一途をたどっている。そのため、「遊ぶ楽しさを味わっていない子ども」「運動に苦手意識をもっている子ども」「動きの発達が未熟な子ども」の増加が問題となっている。

そこで、これらの問題解決の一助として、平成22年度より「チャレンジ運動教室」を開催した。この教室は、運動が苦手な子どもを対象とし、その保護者も参加することが条件となっており、その申込者はこの9年間で1984名である。

保護者、子どものそれぞれのねらいは、次のとおりである。

保護者・・・子どもと一緒に「運動遊び」を楽しみながら、子どもの心身の発育発達の様子を観察したり、それぞれの動きの指導法を身に付けたりする。そして、この教室をきっかけに家庭生活の中で、「運動遊び」を楽しむ時間を積極的に設定

して、子どもの心身の発達を促そうとする態度を育てる。

・子ども・・・「運動遊び」の楽しさやできない動きができる楽しさを味わって、外で思い切り遊ぶ意欲と態度を育てる。

(2) 平成30年度の教室の概要

(a) 参加申込者：210名

- ・ 幼児（5.6歳）とその保護者 57組
- ・ 小学校1.2年生とその保護者 61組

(b) 実施回数：13回

- ・ 前期の部 5/26, 6/2, 6/9, 6/16, 6/30, 7/14, 7/21 (7回)
- ・ 後期の部 10/6, 10/20, 11/17, 11/24, 12/8, 12/15. (6回)

(c) 教室の内容

幼児の部は、走る、跳ぶ、投げる、捕る、支える、回る等の基本的な動きを取り上げて、それぞれの動きの体の動かし方や動きの感じを身に付けるようにした。

小学校の部は、3年生時から学習する「かけっこ」「器械運動」「ボールゲーム」などの運動につながる動きを取り上げて、その動きができるようにした。

各部とも、親子でやさしい動きから難しい動きへと挑戦できるようなゲームを多く取り入れて、課題とする動きが身に付くように配慮した。

本年度は公開講座「高校生のための『子どもにかかわるボランティア講座』」の一環としてのべ80名の高校生が本教室に参加した。高校生は、子どもたちとかかわりながら子ども理解を深めるとともに対応スキルを高めていた。

(4) 子ども教育学科学生の参加者：のべ295名参加

宮内ゼミに所属する学生が、指導教員の指導を受けながら指導内容を計画して実践した。また、本教室参加を希望する学生が、授業科目「子ども支援地域活動」の一環として、参加した。教室開始1時間前に、子どもへのかかわり方や運動指導のポイント等についての事前指導を行った。教室が始まると、担当するグループのマネージメントやつまずいている子どもへの支援を行わせた。教

室終了時には、学生一人一人の反省や学びを話し合う事後指導を行った。

学生にとっては、保護者や子どもとのコミュニケーションのとり方、子どもの発育発達の違いや運動指導法などについて体験的に学ぶ機会となった。運動指導を行った宮内ゼミの学生にとっては、実践的な指導力を向上させる機会となった。

(3) 今後の課題

・子どもが楽しく取り組みながらねらいとする動きが習得できるような教材づくりにさらに取り組む。

・学生による全体指導を行う機会を多く設けるなど、学生が計画し実践するような学生が主体的に運営する教室になるようにした。ここでの学生の学びを明らかにするとともに、教員としての資質・能力向上にどのように寄与しているかを検討したい。

・平成31年でチャレンジ運動教室開催10年が経過する。この10年間の活動を振り返りながら、今後の本教室のあり方や指導内容等を検討して、さらに充実した教室となるようにする。

4. あそびの教室

「絵皿に自由がを描いて遊ぼう」

地域の親子が参加できる活動として、2010年の学部新設年からはじめた本活動は、9回目である。昨年に引き続き「あそびの教室」第9回「絵皿に絵をかいて遊ぼう」を企画し、2018年10月27日（土）に開催した。この「あそびの教室」は、単に子どもを遊ばせるだけのイベントではなく、親子で活動に参加してもらうことで、①家に帰ってからも親子であそぶヒントになるような遊びの提案、②子どもだけでなく親も一緒に遊ぶことで、あそびによる成長と創造の楽しさや大切さを体験してもらうことを目的とした。また準備から当日まで、教員だけでなく学生も参加することで、学生のボランティア精神と創作教育につながることも目的としている。以下、第9回の取り組みである、動物や昆虫、船や飛行機、樹木や家のダンボールによる遊具のあそびと「子どもの絵の話の講座と絵皿作りと自由画制作」について報告する。

(1) スタッフと準備

(a) **スタッフ** 人間発達学部の教職員2名と子ども教育学科1年生4名が参加した。この活動への学生の参加は授業科目「子ども支援地域活動」の一環でもある。

(b) **準備** 準備は6月から10月までの間の内8月中旬～9月の夏季休業を除きおよそ3カ月間である。教員と学生で、本館4階プレイルームと廊下を中心に、設置する段ボールと広告の紙で作った動く船や魚、樹木、子どもの家、動物(キリン、馬、犬、豚等)、昆虫(蟻、クワガタ、カブトムシ、)ゴジラ等の作品を配置した。図画工作室での工作はテーマとして犬やキリンといった特徴があつて制作し易い工作を中心に、制作の提案を続けてきたが、今年は段ボールと広告紙を使った絵皿に子どもが自由画を描くという目的の絵皿制作を試みた。前年度希望の多かった子どもの絵の話について講座を開く準備をした。当日親やスタッフが見本や子どもが遊べるような作品等を制作し準備した。今年は主に課外の時間に修理補強を中心に整備した。動く玩具としてキャストを取り付け、遊びの範囲を広げ、引き続きコンパクトリヤカーを遊具のベースに使った本格的な動くウルトラマンの遊具を本館4階のプレイルームを中心に配置して子どものあそびの準備をした。また教員が広報(都城市や三股町の広報課に協力戴く)、傷害保険の手配、FAXでの参加者の受付を行った。

(2) 当日の活動

「あそびの教室」前日の2019年10月26日(金)に、1年の有志学生で本館5階からプレイルームと廊下に段ボール遊具の作品を搬入した。当日2019年10月27日(土)は、事前打ち合わせ等は8時30分から準備した。主活動は9時から11時(2時間)実施した。本年から親御様を対象に、「子どもの絵の見方」について講演会用の冊子を参考に講座を開いた。その間子どもの皆さんは学生と遊具で楽しく遊び満足の様であった。13時までに反省会と後片付けを終了した。参加者は幼児(5～6歳児を中心に4歳以上の未就学児)と小学生の親子4組、計9名であった。工作の内容は①段ボールと広告紙による絵皿制作、基本素材をあ

らかじめ学生と教員で作ったものを準備して作品のベースに使用する。②広告の紙を2倍に薄めた接着剤(ボンド)を使ってボールを作るシンプルな技法である。①②共に教員から説明を行い、学生ボランティアは主にあそびのパートナーとして活動し、教員が親子の工作を手伝った。時間短縮のために、絵皿等の作品は、学生ボランティアの事前の制作協力に支えられた。

(3) アンケート結果と今後の課題

親へ協力をお願いしたアンケート結果では、「楽しかった」「ためになった」「また『あそびの教室』にきたい」は回答者全員が「はい」という意見であり、「家に帰ってから、やってみようと思う」と「子どものことで、これまで気がつかなかった発見があつた」に関してはやや消極的の反応もあつた。しかし子どもが自由に使えるダンボール遊具での遊びは、参加者には非日常の有意義な活動になったと思われる。今後親が子どものことに注目しやすくなるような配慮や工夫することを検討したい。また自由記述項目では、楽しかった、機会を増やして欲しい等の意見があつた。また、今後も続けて欲しい、更に創造意欲が増したようだ、昨年同様、「幼時期にこのような遊びができる」と良い。「出前講座のようなことをしていただけると図工の楽しさが伝わるのではないか」「子どもに(ぬり絵)が良くないことが分かった」等の意見もあつた。昨年、子どもの自由画について質問があつたのをきっかけに、今年から親御様向けに「子どもの発達段階と子どもの絵について」講座を開いた。絵画と工作が心象表現で繋がっていることや、イメージを育てる工作の理念を理解していただく子育て支援の機会として今後も続ける。

今年のテーマも初回より一貫して親子(幼児・児童)で関わる工作である。工作は大人が積極的にならないと幼児・児童の参加は難しい。ダンボールや紙を使うのは幼児・児童の遊びで大切な安全を、中心に考えているからである。素材の紙から様々なアイデアやイメージを創りだすあそびが紙工作の意味であり、親が制作をしている姿を幼児が見ながら僅かでもお手伝い参加とあそびに興じ

る姿をイメージして企画している。工作は制作しているその時間が“楽しい遊び”であり安易に結果（作品の出来不出来や、出来栄え）を求めるべきではない。この活動は遊びを主体とした幼児・児童の参加に重きを置くもので、工作は親には頑張っている制作の姿を見せて欲しいと願うものである。今後の活動の要望も、幾つか新たな活動の提案もあり更に検討していきたい。一昨年から活動内容の課題、進行の方法などの問題点を克服する為に、短時間ながら講座でお話をし、子どもの自由画表現やあそびとしての工作の本来あるべき姿を説明した。工作は完成を目的とするのではなくプロセスの大切さ、試行錯誤の重要性といった幼児造形教育の理論を参加された保護者の方に解説した。「子どもの時から手を創造的に使おう。失敗も成功も立派な作品である。」というのが更に継続目標である。

今回は「あそびの教室」の9回目であったが、活動の参考になることが数多くあり、更に次年度以降も改善しながらよりよい活動を作り上げていきたいと考えている。

5. 心理サポートについて

心理的な支援が必要な支援学校在校生と卒業生を対象に、継続的な支援を目的としたサポートを行なっている。現在、支援学校在籍児童生徒4名、支援学校卒業生3名が、継続的に平均して月に3回から6回の支援を受けている。サポートを行う日としては、週の水曜日と金曜日の4時から5時である。月に8回程度であり、事前に予約してのサポートとなる。内容としては、コミュニケーションに関する支援と姿勢や動作への支援が主となる。支援によってコミュニケーションがとりやすくなることや、思い通りの姿勢変換や保持、動作がスムーズに行えるようになることでの情緒面の安定等をねらいとしての支援である。継続的に支援を受けることで効果がよりみられることから、支援を受けるための来室が月ごとに増えてきている。